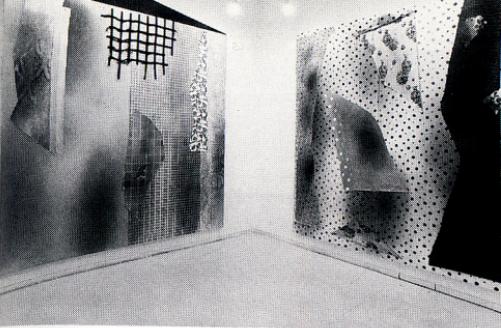


写真に撮つたりすると、あるいは路傍に花を認めるににおいてさえも、そこには必ずといってよいほど内的な作用が宿つてしまう。

TOKYO
1/28-2/2
G-アート・ギャラリー

亀井三千代



この問い合わせの朴訥さを一瞥して、クリスティヴァが「恐怖の権力」のなかで提出したアブジェクト／アブジェクションという概念を、とりあえず、亀井の画稿の上に辿つ

てみること。その時、この作品はある意味での「リアリズム」を獲得することだろう。「アブジェクト（略）」それは崇高で憔悴したこと、それを「具象のまま抽象化

対象＝他者は、一度内部化されることとして、選択され、あるいは「表現」を施され、再現（リプレゼント）される。だが、商品としてすでに規格化された布地の上に「花柄」を認める場合はどうだろう？そこで、花の表象（リプレゼンテーション）そのものが、内部化の前に出現することになるのではないか。花という極めてシンボリックな素材を扱うことから、徹底的に内的加工の過程を剥奪すること、それを「具象のまま抽象化

トーン紙に油彩と水彩で描いた画面に、紙粘土、スチレンボール、針金などを使って、彫塑的な装飾を施した平面作品。とりあえずわれわれにはすでにじみのある構図に「FATHER」という文字があるものが一点。「何故自分が女に生まれてしまったか、何故この時代に生まれたのか。何故自分のお腹の中から生命が誕生するか、何故必ず死ぬか、そんなことが、以前から不思議でしかた無かつた」と亀井三千代は言う。

「我」を巡る問い、その連続の端緒に位置するような問いをいま投げかけられることに対し、われわれが感じる気まずさ。それを、そのまま、現実存在の不安を、たとえばスプラッタ・ムーヴィーのような、メディアがわれわれの日常常に提供するおぞましさに解消できるのだと言い切る嘘にまとわりつく。亀井の作品はその嘘を乗り越える「おぞましさ」をもつ。それは、喜びこそれ、忘却すべきことではないだろう。●開発子工

* 一月号での西本剛氏作品のレビューにおいて、評者に作品主旨文の誤読があるという指摘を受けた。活字を焼くという行為に、ブレーンな差異記号である文字を消失せしめる意志を評者は汲んでしまい、「作者によれば言語は悪役といふことだが」と表記したが、作者によれば、それは書物を「捧げ物」として一部分だけ焼いた行為であり、「言語は悪役ではありえない」ということだ。ここにその部分の表記の不慎重さをお詫びする。